

二 私有財産の形式

a 個人の私有に係る財産。

b 財産——労働用の諸道具。

c 財産——資本。

a 個人の私有に係る財産。人間の食物に始まり、衣服、贅澤品（指環、寶石等）に及ぶ。家屋もまた、此の個人的財産の一部に包括されて居た時代があつた。即ち人間は、龜がその甲を持つて居るやうに、大理石の王宮だの、藁葺小舎だの、何れもその住家を有して居た。故に、よしや産業に對する機械の應用に依て、文明は從來富豪でなければ買へなかつた無數の贅澤品を、貧民の手にも入るやうにしたとは云へ、それは一方で、大多數の國民からその住家を奪つて了ひ、彼等をして、未曾有なる國の中央に在りながら、尙且貸間や貸長屋に住ぶの餘裕なきに到らしめ、そして生産者の私有する財産を、極めて切詰めた限度に減じて了つて居る。

資本家文明は、平民階級をして野蠻人よりも下等な、生活状態に陥れて居る。野蠻人が、他人の爲に労働せざる重要な事實は暫らく措き、單に食物の問題だけに就て云ふも、歐羅巴に侵入群棲したる野蠻人——よしや身には、粗雑に織つた材料や、野獸の皮を纏つて居たに過ぎずとは云へ、豚だの其他の動物の群を所有し、また森林には狩獵、河海には漁業の獲物が饒かだつたから、完成された機械で巧妙には織つてあるが、實に脆弱な膚ひ物で、久しく風雨に耐へざる衣服を着て居る吾が平民階級よりも、遙かに多く肉食して居た。加ふるに、今日の平民階級は往昔の野蠻人に比

し、身體強壯の度を缺き、寒暑に對して羸弱なるを免かれないから、その境遇は一層困難なものとなつて居る。左記の事實は、未開人の強壯剛健に關して、多少の概念を與ふるものである。歐羅巴の有史、前の古墳から、穿顱術を受けたかと思はせる、穿孔の跡を示す頭蓋骨が発見された。人類學者は當初、この頭蓋骨を裝飾又は呪符と思つて、その孔は死後に穿たれたものだとして結論したが、然し竟にブッカ出で、瘻痕治癒の經過の認めらるゝ頭蓋骨、數個を発見せる結果、その穿顱術が死屍に施されたものではない、何となれば、穿顱術を施された人間が、施術後に生存して居ないのだつたから、瘻痕の治癒すべき筈が無いからであると論證した。で、無知な野蠻人が、その粗雑な青銅や、硃土等の器具を用ひて、近世の醫師が、その深遠なる學識と、精巧なる外科器械にも拘はらず、尙且つ危険視して居る斯の如き精妙な手術を、行へる筈がないと云ふ反對説が存する。けれど共、今日では一切の疑懼は、此種の手術が野蠻人に依て行はれ、そして完全な成功を收めて居ると云ふ、積極的な知識に依て除かれて了つた。パアバル人（パアバライ諸邦の山地、サハラ砂漠の北部に住する民族）の間では、今日でも此の手術は戸外で行はれ、そして歐羅巴人の目撃者を吃驚させる事は、數日も経つと穿顱術を施された人間は、頭蓋骨の一部が削り取られた（此の手術は、頭蓋骨の一部を削り取るのである）のは、他人の事のやうな顔をして、平氣で歩いたり仕事をしたりする事である。文明人に對しては、重大な併發病を惹起す頭蓋骨の創痕も、原始的な民族に在つては頗ぶる迅速、容易に治癒して了ふ。俗物が如何に狂信的な熱情を以て、文明を尊崇畏敬しやうとも、文明人の肉體上、及び恐らくは精神上の劣等は、例外のある事は勿論だが、厭でも應でも承